

平成22年度独立行政法人国立美術館年度計画

国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1 美術振興の中心的拠点としての多彩な活動の展開

(1) 多様な鑑賞機会の提供

-1 国立美術館は、利用者のニーズ、研究成果を踏まえ、各館の特色を活かした所蔵作品展を開催する。また、あわせて企画展では、建築、アニメーションやアジアに目を向けた展覧会、作家・作品の再発見・再評価、海外の美術館との連携協力により世界の美術の紹介を目指した展覧会を開催する。

また、各館の企画・連携のあり方を検討し、各館における展覧会企画等の連絡調整を引き続き行うとともに、9月に「影」をテーマとした5館合同企画展「陰影礼讃 - 国立美術館コレクションによる」を国立新美術館で開催する。

映画については、保存・復元の成果を最大に活用しつつ、作家や時代、国やジャンル等さまざまな切り口による上映会を実施して、多様な鑑賞機会の提供を図る。また、大使館等の機関、団体との連携により外国作品を紹介する上映会を開催するほか、前年度に引き続き、映画産業の枠外で製作された日本映画の上映を行う。

なお、入館者に対するアンケート調査を行い、そのニーズや満足度を分析し、結果を展覧会事業等に反映させるとともに、各館のホームページを活用し展覧会事業等の広報により一層努める。

(東京国立近代美術館)

本館・工芸館 目標入館者数計：49万4千4百人

<本館>

所蔵作品展では、近代日本美術の流れを通史的に展観するという同館の役割を踏まえつつ、鑑賞者が関心をもちやすいようめりはりのある展示を行う。また、所蔵作品研究の成果に基づき、解説文の一層の掲出に努めるとともに、南薫造、長谷川利行といった作家の特集展示や、「しみ」、「手探りのドローイング」、「空虚の形態学」等のテーマに基づく小企画を実施する。

企画展では、時代やジャンルのバランスを考慮しつつ編成する。具体的には、回顧展として、近代日本画の代表的作家である小野竹喬と上村松園、近代洋画の重要作家である麻生三郎をとりあげるとともに、戦後の前衛美術の中心作家岡本太郎の個展及び京都国立近代美術館との共同企画により1938年から49年の日本画の前衛的動向を扱う「『日本画』の前衛 1938 - 1949」展を開催する。写真部門では鈴木清の個展を、また、美術館による建築へのアプローチを模索しつつ、「建築はどこにあるの? 7つのインスタレーション」を開催する。

目標入館者数計：41万5千4百人

ア 所蔵作品展 目標入館者数計：16万2千人

「近代日本の美術」展（285日間）5回展示替え
あわせて8回程度の小・中規模の特集展示、小企画の実施

- イ 企画展 目標入館者数計：25万3千4百人
- (ア)「生誕120年 小野竹喬展」
期間：平成22年3月2日（火）～4月11日（日）
（37日間（うち平成22年度10日間））
共催：毎日新聞社、NHK、NHKプロモーション
目標入館者数：3万人（うち平成22年度8千人）
- (イ)「建築はどこにあるの？ 7つのインスタレーション」
期間：平成22年4月29日（木・祝）～8月8日（日）（88日間）
目標入館者数：2万9千人
- (ウ)「上村松園展」
期間：平成22年9月7日（火）～10月17日（日）（36日間）
共催：日本経済新聞社
目標入館者数：15万人
- (エ)「麻生三郎展」
期間：平成22年11月9日（火）～12月19日（日）（36日間）
共催：京都国立近代美術館
目標入館者数：1万2千人
- (オ)「鈴木清展」
期間：平成22年10月29日（金）～12月19日（日）（45日間）
会場：本館ギャラリー4
目標入館者数：1万2千人
- (カ)「『日本画』の前衛 1938 - 1949」
期間：平成23年1月8日（土）～2月13日（日）（32日間）
共催：京都国立近代美術館
目標入館者数：8千人
- (キ)「生誕100年 岡本太郎展」
期間：平成23年3月8日（火）～5月8日（日）
（55日間（うち平成22年度22日間））
共催：NHK、NHKプロモーション、川崎市立岡本太郎美術館（予定）
目標入館者数：8万6千人（うち平成22年度3万4千4百人）

<工芸館>

所蔵作品展では、年間を通して企画性のある特集展示を行う。具体的には、春に恒例の花を主題とした「近代工芸の名品 花」や、近年の収集で充実してきた「アール・デコ」、夏休み企画としての「こども工芸館/おとな工芸館」、さらに巡回展で好評だった「現代の人形」等の展覧会を開催する。

なお、夏季の「こども工芸館/おとな工芸館」では、小・中学校教職員を対象とする研修の実施や工芸館作成のセルフガイドを利用した鑑賞授業のための指導案等を配布するほか、教育現場からの意見も取り入れて、各成長段階にあった鑑賞補助教材

を作成し、児童・生徒による工芸鑑賞の一層の推進に努める。また、大人向けの鑑賞の手引きを作成し、子どもだけでなく、大人も子どもと一緒に楽しく鑑賞できるようにする。

企画展では、「現代工芸への視点」のシリーズ化を図り、近年若い世代で再見されつつある茶の工芸をめぐる新たな動向を検証する特別展や、現代のガラス作家を代表する一人である高橋禎彦の個展を開催する。また、本館ギャラリー4を会場に、現代のプロダクト・デザイン界で重要な地位にある栄木正敏の回顧展を開催する。

目標入館者数計：7万9千人

ア 所蔵作品展 目標入館者数計：5万5千人
「近代工芸の名品 - 花」他（207日間）4回展示替え

イ 企画展 目標入館者数計：2万4千人
（ア）「現代工芸への視点 - 茶事をめぐって（仮称）」
期間：平成22年9月15日（水）～11月23日（火・祝）（60日間）
目標入館者数：1万1千人
（イ）「高橋禎彦展」
期間：平成23年3月1日（火）～5月8日（日）
（63日間（うち平成22年度28日間））
目標入館者数：1万1千人（うち平成22年度5千人）
（ウ）「栄木正敏展」
期間：平成23年1月8日（土）～2月13日（日）（32日間）
会場：本館ギャラリー4
目標入館者数：8千人

<フィルムセンター>

上映会では、所蔵作品を活用して「映画の中の日本文学 Part 3」¹、「生誕百年 映画監督 黒澤明」等の企画を開催するとともに、フィルムセンターの開館40周年にあわせ、「発掘された映画たち2010」²、「フィルム・コレクションに見るNFCの40年」³、「新収蔵作品選集」の3つの上映企画を実施する。また、共催企画としては、「第32回ぴあフィルムフェスティバル」や「ぴあフィルムフェスティバルの軌跡Vol.3」を開催し非商業映画の上映を本年度も継続するとともに、「EUフィルムデーズ2010」⁴、「ポルトガル映画祭2010」⁵、「シネマアフリカ2010」を開催して外国映画の紹介にも力を注ぐ。

展覧会では、スチル写真やポスターの所蔵コレクションを活用しつつ、文学という切り口を導入した「映画の中の日本文学 Part 3」¹や、所蔵の大藤信郎監督資料による「アニメーションの先駆者 大藤信郎」を開催する。また、上映企画と関連させて「生誕百年 映画監督 黒澤明」を開催する。さらに所蔵作品展（映画遺産）の大規模なリニューアルを実施する。

上映会・展覧会 目標入館者数計：11万6千5百人

- ア 上映会 目標入館者数計：10万5千5百人
 (大ホール)
- (ア)「映画の中の日本文学 Part 3」
 期間：平成22年4月6日(火)～5月9日(日)(30日間)
 目標入館者数：1万2千人
- (イ)「フィルムセンター開館40周年記念 発掘された映画たち2010」
 期間：平成22年5月11日(火)～5月27日(木)(15日間)
 目標入館者数：4千人
- (ウ)「EUフィルムデーズ2010」
 期間：平成22年5月28日(金)～6月20日(日)(21日間)
 共催：駐日欧州連合代表部、EU加盟国大使館・文化機関
 目標入館者数：7千5百人
- (エ)「フィルムセンター開館40周年記念 フィルム・コレクションに見るNFC
 の40年(仮称)」
 期間：平成22年6月29日(火)～7月15日(木)
 平成22年7月31日(土)～9月9日(木)(50日間)
 目標入館者数：1万人
- (オ)「第32回びあフィルムフェスティバル」
 期間：平成22年7月16日(金)～7月30日(金)(13日間)
 共催：PFFパートナーズ
 目標入館者数：5千5百人
- (カ)「日葡交流150周年記念 ポルトガル映画祭2010(仮称)」
 期間：平成22年9月17日(金)～10月3日(日)(15日間)
 共催：コミュニティシネマセンター、ポルトガル大使館
 目標入館者数：4千人
- (キ)「映画監督 吉田喜重」
 期間：平成22年10月5日(火)～10月31日(日)(24日間)
 目標入館者数：7千人
- (ク)「生誕百年 映画監督 黒澤明」
 期間：平成22年11月9日(火)～12月26日(日)(42日間)
 目標入館者数：2万6千5百人
- (ケ)「現代フランス映画選集(仮称)」
 期間：平成23年1月7日(金)～2月27日(日)(45日間)
 目標入館者数：1万1千5百人
- (コ)「フィルムセンター開館40周年記念 新収蔵作品選集(仮称)」
 期間：平成23年3月1日(火)～3月27日(日)(24日間)
 目標入館者数：8千5百人
- (小ホール)
- (サ)「京橋映画小劇場No.18 映画の教室2010」
 期間：平成22年5月7日(金)～5月23日(日)(9日間)
 金、土、日曜日のみ上映

目標入館者数：2千人

(シ)「日本インディペンデント映画史シリーズ ぴあフィルムフェスティバルの軌跡Vol.3」

期間：平成22年6月29日(火)～7月23日(金)(22日間)

共催：ぴあ株式会社

目標入館者数：1千人

(ス)「京橋映画小劇場No.19 アニメーションの先駆者 大藤信郎」

期間：平成22年8月20日(金)～9月5日(日)(9日間)

金、土、日曜日のみ上映

目標入館者数：1千5百人

(セ)「京橋映画小劇場No.20 アンコール特集：2009年度上映作品より」

期間：平成22年10月1日(金)～10月17日(日)(9日間)

金、土、日曜日のみ上映

目標入館者数：2千人

(ソ)「シネマアフリカ2010(仮称)」

期間：平成22年11月13日(土)～11月25日(木)(11日間)

共催：シネマアフリカ実行委員会、南アフリカ共和国大使館

目標入館者数：2千5百人

イ 展覧会 目標入館者数計：1万1千人

(ア)「映画資料でみる 映画の中の日本文学 Part 3」

期間：平成22年4月6日(火)～6月20日(日)(66日間)

目標入館者数：3千人

(イ)「アニメーションの先駆者 大藤信郎」

期間：平成22年6月29日(火)～9月9日(木)(63日間)

目標入館者数：2千5百人

(ウ)「生誕百年 映画監督 黒澤明」

期間：平成22年9月17日(金)～10月31日(日)

平成22年11月9日(火)～12月26日(日)(81日間)

目標入館者数：4千人

(エ)常設展「日本映画のあゆみ(仮称)」

期間：平成23年2月1日(火)～3月27日(日)(48日間)

目標入館者数：1千5百人

(京都国立近代美術館)

所蔵作品展では、従来の方針を維持し京都を中心とする近代美術の回顧、展望を試みるとともに、企画展と連動したテーマ性の高い小企画をさらに充実させ、関西を中心とした近代美術を積極的に展示する。また、日本画については、第二次大戦前後の日本画の前衛運動の研究を集中的に紹介する。

企画展では、「京都市立芸術大学創立130年記念事業協賛 Trouble in Paradise:生存のエクソックス」展で現代美術と最新の科学技術が重なり合う新しい領域を紹介し、『日本画』

の前衛 1938 - 1949」展では、戦後日本画の前衛運動の母体となった、日本画の革新運動の調査研究成果を展示する。

目標入館者数計：28万9千人

ア 所蔵作品展 目標入館者数計：10万4千人
コレクション展「近代の美術・工芸・写真」(223日間)4回展示替え
企画展と関連した小企画及びコレクション展単独での特集企画 2回程度

イ 企画展 目標入館者数計：18万5千人

(ア)「マイ・フェイバリット - とある美術の検索目録 / 所蔵作品から」

期間：平成22年3月24日(水)～5月5日(水・祝)

(38日間(うち平成22年度31日間))

目標入館者数：1万人(うち平成22年度8千人)

(イ)「稲垣仲静・稔次郎兄弟展」

期間：平成22年5月18日(火)～6月27日(日)(36日間)

共催：京都新聞社

目標入館者数：1万3千人

(ウ)「ローマ追想 - 19世紀写真と旅」

期間：平成22年5月20日(木)～6月27日(日)(34日間)

共催：国立グラフィック研究所(ローマ)、ジュゼッペ・パニーニ写真美術館(モ
デナ)、モデナ貯蓄銀行基金

目標入館者数：1万4千人

(エ)「京都市立芸術大学創立130年記念事業協賛

Trouble in Paradise: 生存のエシックス」

期間：平成22年7月9日(金)～8月22日(日)(39日間)

目標入館者数：1万人

(オ)「『日本画』の前衛 1938 - 1949」

期間：平成22年9月3日(金)～10月17日(日)(39日間)

共催：東京国立近代美術館

目標入館者数：1万3千人

(カ)「上村松園展」

期間：平成22年11月2日(火)～12月12日(日)(36日間)

共催：日本経済新聞社

目標入館者数：10万人

(キ)「麻生三郎展」

期間：平成23年1月5日(水)～2月27日(日)(47日間)

共催：東京国立近代美術館

目標入館者数：1万人

(ク)「パウル・クレー 創成する芸術(仮称)」

期間：平成23年3月12日(金)～5月15日(日)

(57日間(うち平成22年度17日間))

共催：日本経済新聞社

目標入館者数：7万4千人（うち平成22年度1万7千人）

（国立西洋美術館）

所蔵作品展では、松方コレクションとあわせて版画素描展示室における小企画として、フランス近代作家の素描を中心とする「所蔵水彩・素描展」のほか、「フランス近代版画展」、「イタリア版画展」を開催する。

企画展では、「ナポリ・宮廷と美 - カポディモンテ美術館展 ルネサンスからバロックまで」において、ナポリ宮廷が収集したイタリア、ルネサンスとバロック期の美術を一堂に会しナポリのカポディモンテ美術館の優品を紹介する。「アルブレヒト・デューラー版画・素描展 宗教／肖像／自然」では、海外の美術館から借用した作品と同館の所蔵作品によって、デューラーの版画芸術の全貌を「宗教」、「肖像」、「自然」という三つの観点から紹介する。「レンブラント：光の画家（仮称）」では、オランダのレンブラント・ハウスとの共同企画により、油彩画のほか、和紙を用いたレンブラントとレンブラント派の版画に関する最新の研究成果を紹介する。

目標入館者数計：62万人

ア 所蔵作品展 目標入館者数計：25万人（310日間）

「ルネッサンス以降のヨーロッパ近世絵画」

「近・現代絵画と彫刻」

イ 企画展 目標入館者数計：37万人

（ア）「フランク・ブラングイン展」

期間：平成22年2月23日（火）～5月30日（日）

（85日間（うち平成22年度53日間））

共催：読売新聞社

目標入館者数：7万人（うち平成22年度5万人）

（イ）「ナポリ・宮廷と美 - カポディモンテ美術館展 ルネサンスからバロックまで」

期間：平成22年6月26日（土）～9月26日（日）（81日間）

共催：TBS、東京新聞

目標入館者数：25万人

（ウ）「アルブレヒト・デューラー版画・素描展 宗教／肖像／自然」

期間：平成22年10月26日（火）～平成23年1月16日（日）（67日間）

共催：朝日新聞社

目標入館者数：3万人

（エ）「レンブラント：光の画家（仮称）」

期間：平成23年3月12日（土）～6月12日（日）

（81日間（うち平成22年度17日間））

共催：日本テレビ放送網

目標入館者数：20万人（うち平成22年度4万人）

(国立国際美術館)

所蔵作品展では、現代美術の動向を発信するため、特に新収蔵作品を有効に活用した展示を行う。

企画展では、国際的に知られるグラフィックデザイナーで画家の横尾忠則から寄贈を受けた全ポスターによる展覧会を開催するとともに、「ウフィツィ美術館 自画像展」では、同館秘蔵の自画像コレクションを一堂に紹介する。

また、若手の映像作家 束芋の新作個展やアジアを中心とした新しいコンセプチュアル・アートをとらえる展覧会を開催し、幅広い客層の関心に応じる。

目標入館者数計：68万1千人

ア 所蔵作品展 目標入館者数計：25万2千人
「コレクション1～4」(197日間) 3回展示替え

イ 企画展 目標入館者数計：42万9千人
(ア)「国立国際美術館新築移転5周年記念 絵画の庭 ゼロ年代日本の地平から」
期間：平成22年1月16日(土)～4月4日(日)
(68日間(うち平成22年度4日間))

共催：朝日新聞社、朝日放送
目標入館者数：2万人(うち平成22年度1千人)

(イ)「ルノワール - 伝統と革新」
期間：平成22年4月17日(土)～6月27日(日)(63日間)
共催：読売新聞社、読売テレビ
目標入館者数：13万1千人

(ウ)「死なないための葬送 - 荒川修作初期作品展」
期間：平成22年4月17日(土)～6月27日(日)(63日間)
目標入館者数：13万3千人

(エ)「束芋：断面の世代」
期間：平成22年7月10日(土)～9月12日(日)(56日間)
目標入館者数：2万5千人

(オ)「横尾忠則全ポスター」
期間：平成22年7月13日(火)～9月12日(日)(54日間)
共催：日本経済新聞社
目標入館者数：2万4千人

(カ)「マン・レイ展」
期間：平成22年9月28日(火)～11月14日(日)(42日間)
共催：日本経済新聞社
目標入館者数：2万人

(キ)「ウフィツィ美術館 自画像展」
期間：平成22年11月27日(土)～平成23年2月20日(日)(67日間)
共催：朝日新聞社
目標入館者数：9万人

(ク)「風穴 - もうひとつのコンセプチュアリズム、アジアから」

期間：平成23年3月8日(火)～6月5日(日)

(78日間(うち平成22年度21日間))

目標入館者数：1万9千人(うち平成22年度5千人)

(国立新美術館)

自主企画展では、日本を中心に海外にも眼を配り、新しい現代美術の状況を、若手作家の先鋭な活動を中心に毎年定期的開催しているグループ展「アーティスト・ファイル」(2010及び2011)において紹介する。

共催展では、広く近現代美術及び西洋美術を対象とし、新たな視点による展覧会を実施しているが、本年度は特に19世紀後半から20世紀にかけての西欧の近代美術の展開に焦点を当てる。

印象派からポスト印象派への展開を新しい視点から捉えた「オルセー美術館展2010 「ポスト印象派」」や印象派の巨匠ルノワールの全貌を捉える回顧展、ポスト印象派の巨匠ゴッホの芸術の成立に迫った個展では、19世紀後半から末における近代絵画の誕生を検証し、紹介する。また、20世紀を代表する陶芸家ルーシー・リーの回顧展、ポンピドゥー・センターの所蔵作品によるシュルレアリスムの誕生と展開をたどった展覧会、20世紀の前衛芸術と写真に大きな足跡を残したマン・レイの回顧展により、20世紀のモダニズム芸術の多様な展開を検証する。

さらに、本年度の新たな試みとして、独立行政法人国立美術館の5つの美術館が共同企画した「美術における影」をテーマとする展覧会を開催し、ナショナルコレクションの充実と研究員の企画力を示す。

目標入館者数計：93万5千人

(ア)「ルノワール - 伝統と革新」

期間：平成22年1月20日(水)～4月5日(月)

(66日間(うち平成22年度5日間))

共催：読売新聞社、日本テレビ放送網

目標入館者数：22万人(うち平成22年度2万人)

(イ)「アーティスト・ファイル2010 - 現代の作家たち」

期間：平成22年3月3日(水)～5月5日(水・祝)

(56日間(うち平成22年度31日間))

目標入館者数：2万7千人(うち平成22年度1万5千人)

(ウ)「ルーシー・リー展」

期間：平成22年4月28日(水)～6月21日(月)(48日間)

共催：東京国立近代美術館、日本経済新聞社

目標入館者数：4万8千人

(エ)「オルセー美術館展2010 「ポスト印象派」」

期間：平成22年5月26日(水)～8月16日(月)(72日間)

共催：日本経済新聞社

目標入館者数：28万人

(オ)「マン・レイ展」

期間：平成22年7月14日(水)～9月13日(月)(54日間)

共催：日本経済新聞社

目標入館者数：8万1千人

(カ)「陰影礼讃 - 国立美術館コレクションによる」

期間：平成22年9月8日(水)～10月18日(月)(36日間)

目標入館者数：1万8千人

(キ)「ゴッホ展」

期間：平成22年10月1日(金)～12月20日(月)(70日間)

共催：東京新聞、TBS

目標入館者数：27万人

(ク)「DOMANI・明日展2010」

期間：平成22年12月11日(土)～平成23年1月23日(日)(26日間)

共催：文化庁

目標入館者数：1万3千人

(ケ)「平成22年度[第14回]文化庁メディア芸術祭」

期間：平成23年2月2日(水)～2月13日(日)(11日間)

共催：文化庁、CG-ARTS協会

目標入館者数：4万5千人

(コ)「シュルレアリスム展(仮称)」

期間：平成23年2月9日(水)～5月9日(月)

(78日間(うち平成22年度44日間))

共催：読売新聞社

目標入館者数：23万4千人(うち平成22年度13万2千人)

(サ)「アーティスト・ファイル2011 - 現代の作家たち」

期間：平成23年3月2日(水)～5月5日(木・祝)

(57日間(うち平成22年度26日間))

目標入館者数：2万8千人(うち平成22年度1万3千人)

国立美術館 目標入館者数計：313万5千9百人

所蔵作品展(展示)：83万4千人

企画展(企画上映)：230万1千9百人

-2 国立美術館における企画機能の強化を図るため、引き続き、交換展・共同企画展の充実と、所蔵作品の相互貸出の推進に努めるとともに、平成23年度以降における新たな5館合同企画による展覧会の開催について検討を行う。また、さらなる企画機能強化のため、各館研究員の協働や人材の活用等について検討する。

-3 国立美術館全体の所蔵作品を最大限に活かした5館合同企画による展覧会を開催する。

名称：「陰影礼讃 - 国立美術館コレクションによる」

会期：平成22年9月8日(水)～10月18日(月)(36日間)

会場：国立新美術館 2階企画展示室

概要：視覚芸術の起源と深く関わるにも関わらず、総合的に顧みられることが従来ほとんどなかった「影」をテーマとした展覧会。約160点で構成。

地方における鑑賞機会の充実及び美術の普及を図るため、全国の公私立美術館等と連携して、地方巡回展を実施する。また、全国の公立文化施設等において優秀映画鑑賞推進事業を実施する。

ア 国立美術館巡回展

「現代美術への誘い(仮称)」(担当館：国立国際美術館)

国立国際美術館が所蔵する現代絵画・写真作品から、戦後の欧米の代表作から最新の動向までを展示し、現代美術の多様な拡がりを探る。あわせて、講演会・シンポジウム等を実施する。

(ア) 期間：平成22年8月5日(土)～10月3日(日)

会場：宮城県美術館

(イ) 期間：平成22年10月16日(土)～12月5日(日)

会場：都城市立美術館(宮崎県)

イ 各館の巡回展

(ア) 巡回展「東京国立近代美術館工芸館名品展」

a 期間：平成22年7月17日(土)～9月5日(日)

会場：香川県立ミュージアム

b 期間：平成22年9月18日(土)～10月31日(日)

会場：愛媛県美術館

(イ) 「東京国立近代美術館所蔵 工芸名品展」

期間：平成22年8月26日(木)～9月11日(土)

会場：和光ホール(東京都)

ウ 優秀映画鑑賞推進事業

広く国民に優れた映画鑑賞の機会を提供し、あわせて国民の映画文化や映画芸術への関心を高め、映画フィルム保存の重要性についての理解を促進するため、文化庁との共催事業として、教育委員会、公共文化施設等と連携・協力して、全国各地で映画の巡回上映を実施する。

プログラム：100作品25プログラム(1プログラム4作品)

日本映画史を彩る名匠たちの代表作やスターが活躍するヒット作、時代劇、青春映画等、それぞれのジャンルを代表する名作、時代を画した話題作等で構成し、同時に、地域の特色を持った構成により、多くの会場が参加できる工夫をする。

期間：平成22年7月12日(月)～平成23年3月13日(日)

エ 巡回上映

(ア) 「生誕百年 映画監督 山中貞雄」巡回事業

期間：平成22年4月～平成23年3月（予定）

会場：全国5会場（予定）

共催：コミュニティシネマセンター

(イ)「日本の初期アニメーション映画」

期間：平成22年5月（予定）

会場：韓国映像資料院 K O F A シネマテーク

共催：韓国映像資料院

国立美術館は、展覧会ごとに実施目的、想定する入館者層、実施内容、学術的意義、良好な観覧環境の確保、広報活動、過去の入館者等の状況等を踏まえて入館者数の目標を設定し、その達成に努める。

(2) 美術創造活動の活性化の推進

国立新美術館は、さまざまな美術表現を紹介し、新たな視点を提起する展覧会事業を行う。

ア 美術団体等に次の展覧会（「公募展」）会場の提供等を行う。

(ア) 平成22年度に公募展を開催する美術団体等に会場を提供する。

(イ) 平成24年度に施設を使用する美術団体等を決定する。

(ウ) 美術団体等が快適に施設を使用できる環境と、連携して行う教育普及事業の充実を図る

(エ) 公募団体関係者からの意見を踏まえ、バックヤード等の使用や展覧会開催に当たっての改善方法を検討する。

イ 多様化する内外の新しい美術の動向を積極的に取り上げ、支援するとともに、広く紹介するため、グループ展「アーティスト・ファイル」をはじめとする企画展等を実施する。

メディアアートなど、国際的にも注目される新しい芸術表現を取り上げる展覧会等について、以下のとおり実施する。

ア 東京国立近代美術館では、世代もタイプも異なる7組の日本の建築家の新作インスタレーションにより「建築はどこにあるの？ 7つのインスタレーション」を開催し、美術館ならではの建築との関わりを探究する。

イ 東京国立近代美術館フィルムセンターでは、前年度に引き続き、日本の初期アニメーション映画のパッケージを、ソウル（韓国）等で上映する。

ウ 京都国立近代美術館では、京都市立芸術大学と京都大学医学部の協力を得て、現代美術と最新のテクノロジー、特に精神医療の分野での重なり合う活動を検証し、現代美術とテクノロジーが切り拓く新しい表現と、現実世界での有効性を探る「Trouble in Paradise: 生存のエシックス」展を開催する。

エ 国立西洋美術館では、社団法人日本建築学会とともに国立西洋美術館本館の保存活用計画策定に関する調査を引き続き実施する。

また、世界遺産登録に向けて、引き続き地域住民との連携を図るため、台東区住民等を対象とした国立西洋美術館本館見学会を台東区と共同して実施する。

オ 国立国際美術館では、現代のアニメーション作品で最も注目されている作家の一人

である束芋の新作展を実施する。

カ 国立新美術館では、「アーティスト・ファイル」(2010、2011)及び5館合同企画展「陰影礼讃 - 国立美術館コレクションによる」においてビデオアート等の作品を、「文化庁メディア芸術祭」においてメディアアートやアニメ作品を紹介する。また、館内モニターを活用し、メディアアートを上映する。

(3) 美術に関する情報の拠点としての機能向上

国立美術館は、所蔵作品、展覧会活動、その他の活動状況をホームページ等を活用し積極的に広く社会に紹介し、国立美術館についての理解を得るよう努める。

また、所蔵作品情報については、前年度に実施した国内版画家の著作権者の調査等に基づき、許諾を得たものについて所蔵作品総合目録検索システムに掲載し、収録画像の増加に努めるとともに、本年度は水彩素描その他の作品の著作権者の調査を実施する。

これらにあわせて、所蔵作品総合目録検索システム、東京国立近代美術館・国立新美術館図書検索システム、国立新美術館アートコモンズ及び国立西洋美術館作品検索等の連携情報システム(国立美術館版「想 - IMAGINE」)を継続して公開する。

また、国立美術館の情報資源と国立国会図書館デジタルアーカイブポータル(PORTA)及び国立情報学研究所によるWebcatPlus、文化遺産オンライン等に掲載の文化情報資源を、国立情報学研究所の「想 - IMAGINE」において連携するための調査研究を継続して実施する。

国立新美術館では、インターネットによる展覧会情報システム「アートコモンズ」の利便性向上とともに、引き続き国内美術展カタログの海外への寄贈事業(Japan Art Catalogプロジェクト)の充実を図る。

法人本部のホームページについて内容の充実を図り、国立美術館の活動について周知広報を強化する。

また、各館の日本語版・英語版ホームページの内容の充実に努め、展覧会情報や調査研究成果の公表等、積極的な情報発信に努める。

(東京国立近代美術館)

ア 研究紀要15号(平成22年度刊行予定)の全文を、平成23年3月を目途にホームページで公開する。

イ 企画展、所蔵作品展に関する紹介の英文ホームページを日本語ページと同じくCMS機能の活用により、そのデータの拡充・更新に努める。

(京都国立近代美術館)

ア 研究誌「CROSS SECTIONS」第3号を刊行し、日頃の研究成果、館独自の活動を公表する。また、前年度から継続する科学研究費の成果も同誌に盛り込む。

イ 展覧会図録を寄贈している京都府立図書館、大阪府立中央図書館、滋賀県立図書館、兵庫県立図書館、奈良県立図書情報館において、前年度に引き続き各図書館のホームページに、寄贈した図録を蔵書リストとして掲載・更新する。

(国立西洋美術館)

ア 所蔵作品に関して、引き続き国内外に向けての積極的な情報開示に努める。常設展(所蔵作品展)に何が展示されているか、また個々の作品はどのような資料に言及されているか等について、ホームページに日本語及び英語データの追加登録、更新を行

う。あわせてデジタル画像の利便性についての検討を行う。

イ 展覧会情報やイベント情報等の同館の活動全般に関し、引き続き日英二ヶ国語で情報を発信する。「国立西洋美術館ニュース ZEPHYROS」の全文掲載を継続して行う。

(国立国際美術館)

ア 所蔵作品、展覧会情報、講演会、教育普及事業等のイベント情報をホームページに掲載する。

イ 情報コーナーのパソコンによる所蔵作品閲覧の充実を図る。

ウ ホームページの全面改訂も視野に入れ、視認性、操作性に優れたホームページについての調査研究を行う。

(国立新美術館)

ア 携帯版ホームページやメールマガジンの充実を図り、一層の情報発信を推進する。

イ 所蔵する写真資料や戦後日本の展覧会のテキスト・データをホームページ上で公開し、情報資源の積極的な活用を図る。

美術史その他関連諸学に関する資料、国内外の美術館や展覧会に関する情報及び資料を収集し、各館の情報コーナー、アートライブラリー、資料閲覧室等において、情報サービスの提供を実施する。

また、全国美術館会議情報・資料研究部会の企画セミナー(2010年9月実施予定)に講師として参加(東京国立近代美術館、国立西洋美術館、国立新美術館から)し、全国の美術館学芸員に対し、近年の美術情報・資料に関わる動向について紹介し最新情報の提供に努める。

ア 東京国立近代美術館では、近現代美術関連資料を本館アートライブラリ、近現代工芸関連資料を工芸館図書閲覧室、映画関連の図書資料をフィルムセンター図書室において収集し、公開する活動を継続的に進める。

イ 国立西洋美術館では、研究資料センターにおいて西洋美術に関する資料の収集・公開活動を継続的に行う。図書検索システムの継続的運用及び電子ジャーナルとの連携機能強化を図るため、老朽化した図書館システムの更新について検討する。

ウ 国立国際美術館では、情報コーナーにおける国内外の美術図書の充実に取り組むとともにパソコンによる所蔵作品閲覧の充実を図る。

エ 国立新美術館では、日本の現代美術に関する資料アーカイブの構築を引き続き進めるとともに、貴重図書等の特別閲覧サービスの充実及び普及に努める。

所蔵作品データのデジタル化及び公開を推進する。特に国内版画家に続き、国内水彩素描その他の作品の著作権許諾手続きを進め、国立美術館所蔵作品総合目録検索システムの掲載画像の増加に努める。あわせて、同システムにおいて、作家及び作品に関する解説文の閲覧が可能となるようコンテンツの充実を図る。

また、いわゆる情報セキュリティポリシーにあたる「国立美術館情報資産安全対策基本方針」、「国立美術館情報資産安全管理規則」を踏まえ、安全管理のための実施細則の策定を進める。

(4) 国民の美的感性の育成

引き続き、年齢や理解の程度に応じたきめ細かい多様な事業を展開するとともに、美

術教育に携わる教員等に対する美術館を活用した鑑賞教育に関する研修や学校で活用できる教材「アートカード」の貸し出しなどの事業を行い美術の一層の普及を図る。また、学校や社会教育施設に対して、これら事業の広報に努める。

若年層の鑑賞機会の拡大を図るため、高校生以下及び18歳未満の観覧料無料化の普及広報に努めるとともに、大学等を対象とする会員制度「キャンパスメンバーズ」の加入校増加を目指す。また、昨年度まで対象外であった東京国立近代美術館フィルムセンターの上映会にも拡大を図る。

(東京国立近代美術館)

<本館>

所蔵作品展、企画展とともに、幅広い層にあわせたレベルと内容の教育普及プログラムを実施する。特に小・中学生、高校生への鑑賞教育は、生涯にわたって美術と美術館に親しむための基礎的な学びの機会として位置づけ、学校と連携しつつ実施し、調査・研究を進める。

ア 企画展に関する講演会やシンポジウム、ギャラリートークの実施

イ 所蔵作品展に関するアーティスト・トーク(5回)、キュレーター・トーク(約15回)、解説ボランティアによる所蔵品ガイドやハイライトツアー(300回程度)の実施

ウ 企画展に関する教員のためのレクチャー付き内見会、小・中学生のためのセルフガイドの会場配布(通年)、スクールプログラムのパンフレットを学校へ送付

エ 小・中・高等学校や大学からの要請に応じた、児童・生徒・学生へのギャラリートーク、教員研修の実施、鑑賞教材の貸出(アートカード)

オ 夏季の「こども美術館」において、子どもの創作活動に関連付けた鑑賞プログラムの充実

カ 教員研究団体(東京都図画工作研究会・東京都中学美術研究会)との連携による研修の実施

<工芸館>

所蔵作品展、企画展ごとにギャラリートークや工芸館ガイドスタッフによる鑑賞プログラム「タッチ&トーク」のほか、観覧者の層に応じた様々な教育プログラムを実施する。

ア 研究員のほか、外部研究者や作家によるギャラリートーク(12回)及び講演会等(1回)の実施

イ 解説ボランティア(工芸館ガイドスタッフ)による鑑賞プログラム「タッチ&トーク」(90回程度)の実施

ウ 各種教育機関からの要請に応じて、児童・生徒に対するギャラリートークや「タッチ&トーク」の実施

エ 夏季の「こども工芸館」において、小・中学校教職員等を対象とした事前研究会の実施、指導案の配布

オ 夏季の「こども工芸館」において、児童を対象とした工芸作品の鑑賞補助教材の作成・配布と会期中の鑑賞教室(こどもタッチ&トーク)の実施

カ 夏季の「おとな工芸館」において、中学生以上の観覧者を対象とした工芸作品の鑑賞補助教材の作成・配布

キ 作家指導による児童・生徒を対象とした染織の技法体験を通じた、鑑賞教育のモデ

ルケースの開発

<フィルムセンター>

- ア 上映会・展覧会におけるトーク・イベント等の実施
- イ 研究員の解説や弁士の公演等も交えながら映画の多様性に触れる機会をつくることを目指す「こども映画館」を実施（夏休み期間、4日間程度）
- ウ エイベックス・グループ・ホールディングス株式会社との共同主催により学生層を対象にした「カルト・ブランシュ 期待の映画人・文化人が選ぶ日本映画」を実施（年間4日間程度）
- エ 相模原分館増築工事の進捗状況を踏まえつつ、相模原市及び独立行政法人宇宙航空研究開発機構との文化事業等協力協定に基づく上映会及び相模原市内の小・中学生を対象とした上映会の実施（相模原市教育委員会との協力事業）に努める。

（京都国立近代美術館）

前年度に引き続き、幅広い層の美術鑑賞教育への関心を高めることを重点目標に置き、外部からの自発的要望を積極的に支援し、美術鑑賞教育の核としての現場指導者の質の向上及び指導者の数的拡大を目指す。

- ア 学校等からの要請による美術館利用についての教員研修会等の受入れの促進
- イ 教員やNPO団体の美術館利用プログラムに対する支援
- ウ 学校、各種団体からの要請による解説の実施
- エ 小・中・高等学校及び大学の授業や課外活動との積極的な連携
- オ 企画展に関連した講演会（8回程度）の実施
- カ 東京国立近代美術館フィルムセンターとの共同主催による映画上映を定期的に（年4回程度）実施

（国立西洋美術館）

児童・生徒を対象としたプログラムをはじめ、多くの人々に美術と美術館に親しんでもらうためのプログラム、コレクションを活用したテーマ性のある企画、対象を限定したプログラム等、それぞれの効果を考慮した幅広いレベルと内容のプログラムを提供する。

- ア 企画展に関連した「先生のための観賞プログラム」の実施（小・中・高等学校の教員対象）（3回）
- イ ファミリー・プログラム「どようびじゅつ」（16回程度）、「びじゅつーる」（12回程度）の実施
- ウ 「スクール・ギャラリートーク」（小・中・高等学校の団体対象）の実施（予約制）
- エ クリスマス・プログラム（10分トーク、クリスマスキャロル・コンサート）の実施
- オ 障害者を対象とする特別プログラムの実施（1回）
- カ 企画展に関連した講演会（6回程度）、スライドトーク（9回程度）及び音楽プログラム（1回）の実施
- キ 毎週日曜日にボランティアによる「美術トーク」、「建築ツアー」の実施

（国立国際美術館）

幅広い層の人々が美術館に親しみ、美術鑑賞の機会を身近に感じられるよう、企画展ごとに関連講演会、ギャラリートーク等を開催する。また、低年齢層も同様に美術鑑賞の機会を享受できるよう、子ども向けの各種プログラムを実施する。その他、美術館が

より開かれた場所となるよう、各種イベントを開催する。

- ア 鑑賞支援教材制作に関連した「ジュニア・セルフガイド」の発行
- イ 鑑賞実践プログラムに関連した「こどもびじゅつあー」(8回程度)の実施
- ウ 鑑賞支援制作プログラムに関連した「こどものためのワークショップ」(4回程度)の実施
- エ 大学の課外授業及びスクーリングによる団体鑑賞の受入れ
- オ 小・中・高等学校の団体鑑賞の受入れ
- カ 鑑賞教育に関する教員研修の実施(予約制)
- キ 企画展に関連した講演会(12回程度)、ギャラリートーク及びアーティストトーク(8回程度)、コンサート等、イベントの実施

(国立新美術館)

来館者の作品鑑賞の充実を目的として、展覧会ごとに講演会やアーティストトークを実施するほか、より多くの人々に美術に親しむ機会を提供するためのプログラムを幅広い層を対象に実施する。

- ア 展覧会に合わせた講演会及びアーティストトーク等の実施(10回)
- イ 講演会及び子どもから大人まで幅広い層を対象にした作家等によるワークショップの実施(6回)
- ウ 美術団体等との連携による講演会、鑑賞会及びギャラリートーク等の実施
- エ 中学生以上を対象とした鑑賞ガイドの作成及び配布(2回)
- オ 児童、生徒、学生を対象とした鑑賞ガイダンスの実施

ボランティアや支援団体の育成と相互協力による教育普及事業の充実を図る。

(東京国立近代美術館)

<本館>

- ア 本館ガイドスタッフ(ボランティア)約40名により、所蔵作品展の所蔵作品ガイド(開館時毎日、300回程度)及び「ハイライト・ツアー」(10回程度)を実施する。
- イ 本館ガイドスタッフによる小・中学生グループの受入れ等、鑑賞教育の充実を図る。
- ウ 研究員等によるフォローアップ研修を開催して、ガイドスタッフの意欲とガイドテクニックの向上を図る(年2回)。
- エ ボランティア活動報告書を作成する。

<工芸館>

- ア 工芸館ガイドスタッフ(ボランティア)約30名により、一般観覧者向けの鑑賞プログラム「タッチ&トーク」(会期中の水・土曜日、90回程度)及び夏季の児童向けの鑑賞プログラム「こどもタッチ&トーク」を実施する。
- イ 工芸館ガイドスタッフにより、外国人及び国際的な文化交流に関心を持つ日本人を対象とした英語による鑑賞教室を実施する。
- ウ 研究員等によるフォローアップ研修や作家によるレクチャーを開催して、ガイドスタッフの意欲とガイドテクニックの向上を図る。

(京都国立近代美術館)

- ア 京都市との連携により、京都市教育委員会が主催する「京都市博物館ふれあいボランティア養成講座」の中からボランティアを受け入れ、来館者へのアンケート調査等

に携わってもらうことで、ボランティアの経験、知識の向上等に協力する。

イ 友の会については、幅広い年齢層の会員参加が可能となるような行事の開催等、活動内容等の充実を図るとともに、京都国立博物館、京都市美術館、京都文化博物館と連携して会員証提示による優待割引を実施する。

(国立西洋美術館)

ア ボランティアスタッフによる、ファミリープログラム、小・中・高等学校生の団体を対象とした常設展(所蔵作品展)でのスクール・ギャラリートーク、週末の一般向け「美術トーク」及び「建築ツアー」を実施する。ファミリープログラムの「どようびじゅつ」(16回程度)については企画から参加してもらうことでボランティアの育成にもつながるようにする。その他に、クリスマス・プログラムを行う。

イ ボランティアの育成を目的として、プログラム遂行のためのスキルアップ研修及び広く美術に関する知識を学ぶための研修を実施する(年2回程度)。

ウ 都立上野高校の「奉仕」課外授業に協力し、高校生ボランティアを育成する。

(国立国際美術館)

ア 学生ボランティアを受け入れ、展覧会、講演会及びワークショップ等のプログラムに参加させるなど、活動の充実を図る。また、美術資料の整理を通じ、美術館活動の基本を学べるようにする。

イ 友の会については、会員参加型のイベントの開催等、活動内容等の充実を図るとともに、法人会員の加入に努める。

(国立新美術館)

ア 国立新美術館サポート・スタッフとして学生ボランティアを受け入れ、美術館における業務の補助を通じた実務経験の機会を提供する。

イ 教育普及事業等への企業協賛の継続を図る。

ウ 近隣関係施設と連携・協力し、マップを配布する。

東京国立近代美術館フィルムセンターと京都国立近代美術館との共同主催により、所蔵フィルムを用いた上映会を京都で開催し、鑑賞機会の拡大と映画文化の普及を図る。(年4回程度)

(5) 国立美術館における展示、教育普及その他の美術館活動の推進を図るため、調査研究を計画的に実施し、その成果を美術館活動に反映させる。実施に当たっては、国内外の博物館・美術館及び大学等の機関との連携を図る。さらに、館外の学術雑誌、学会等に掲載・発表するとともに、研究紀要を発行するなど、調査研究成果を発信するよう努める。

また、募集情報等の共有を図り、科学研究費補助金等の研究助成金の申請や外部資金の獲得を促進する。

(東京国立近代美術館)

<本館>

展覧会開催のための調査研究を次のとおり実施する。

ア 現代日本の建築に関する研究

イ 上村松園に関する研究(京都国立近代美術館との共同研究)

ウ 麻生三郎に関する研究(京都国立近代美術館、愛知県美術館との共同研究)

エ 鈴木清に関する研究（ノルデルリヒト・フォト・ギャラリー（オランダ・フローニンゲン）との共同研究）

オ 岡本太郎に関する研究（川崎市岡本太郎美術館との共同研究）

カ パウル・クレーに関する調査研究（クレー財団（スイス）、京都国立近代美術館との共同研究）

教育普及その他の美術館活動のための調査研究を次のとおり実施する。

ア 鑑賞教育に関する美術館と学校の連携や、学校の授業と美術館での鑑賞の連続性に関する調査研究（東京都図画工作研究会、東京都中学美術研究会等との共同研究）

イ 前年度本版として公開した国立美術館版「想 - IMAGINE」の収録コンテンツの拡充と、ユーザーインターフェイスの改良について国立情報学研究所と連携した開発

ウ 国立美術館の情報資源と国立情報学研究所による WebcatPlus、文化遺産オンライン等に掲載の文化情報資源を、「想 - IMAGINE」において連携して検索・閲覧できるシステムの公開に関する調査研究

エ 「1960～70年代のビデオ・アート：作品の所在調査とデータ・ベース構築」（科学研究費補助金）3年目

<工芸館>

展覧会開催のための調査研究を次のとおり実施する。

ア 現代の茶の工芸に関する調査研究

イ 陶芸家ルーシー・リーに関する調査研究（国立新美術館、益子陶芸美術館、大阪市立東洋陶磁美術館との共同研究）

ウ プロダクトデザインの近年における展開についての調査研究

教育普及その他の美術館活動のための調査研究を次のとおり実施する。

ア 工芸作品の鑑賞方法や美術館教育のあり方の調査研究（東京家政大学、実践女子大学との共同研究）

イ 染織制作体験によって児童・生徒が、より質の高い作品理解を得るための鑑賞教育のあり方に関する調査研究（多摩美術大学との共同研究）

<フィルムセンター>

収集・保存のための調査研究を次のとおり実施する。

ア 国際フィルム・アーカイブ連盟（F I A F）会員、その他同種機関、現像所等からの情報に基づく、未発見の日本映画フィルムの所在調査

イ 文化庁との共同事業による「近代歴史資料調査」の結果に基づき、新たに残存が確認された映画フィルムの詳細調査

ウ 映画フィルムの登録・長期保管・保存、アナログ及びデジタル技術を活用した復元、及び映写に関する調査研究（F I A F 会員、国内外の同種機関、映画研究教育機関、美術館・博物館、映像機器メーカー、現像所等との共同研究）

エ 全国の映画関連資料の所蔵機関を対象としたコレクション等の状況調査
上映会、展覧会及び教育普及事業のための調査研究を次のとおり実施する。

ア 昭和期戦後の日本文学と日本映画の関係に関する調査研究

イ 新たに発掘、復元された映画とその作者、技術フォーマットや時代背景に関する調査研究

ウ 現代欧州映画に関する研究

エ フィルムセンターの歩みとコレクションの歴史に関する調査研究

オ 映画産業の枠外で制作された日本映画・インディペンデント映画等の歴史に関する調査研究

カ ポルトガル映画に関する調査研究

キ 吉田喜重監督に関する調査研究

ク 黒澤明監督と俳優志村喬に関する調査研究

ケ 現代フランス映画に関する調査研究

コ 新収蔵作品とその作者や時代背景に関する調査研究

サ 大藤信郎と日本アニメーションの歴史に関する調査研究

シ アフリカ映画の歴史と現在に関する調査研究

(京都国立近代美術館)

展覧会開催のための調査研究を次のとおり実施する。

ア 日本画家・稲垣仲静及び染織家・稲垣稔次郎に関する調査研究(練馬区立美術館、笠岡市立竹喬美術館との共同研究)

イ 19世紀イタリアの写真に関する調査研究(ジュゼッペ・パニーニ写真美術館(イタリア・モデナ)との共同研究)

ウ 現代美術の先鋭的な部分と最新の科学技術、医療技術が重なり合う領域に関する調査研究(京都市立芸術大学、京都大学医学部との共同研究)

エ 戦後の日本画前衛運動の母体となった諸運動に関する調査研究(東京国立近代美術館、広島県立美術館との共同研究)

オ 日本画家・上村松園に関する調査研究(東京国立近代美術館との共同研究)

カ 麻生三郎に関する調査研究(東京国立近代美術館、愛知県美術館との共同研究)

キ パウル・クレーに関する調査研究(クレー財団(スイス)、東京国立近代美術館との共同研究)

教育普及その他の美術館活動のための調査研究を次のとおり実施する。

ア 美術館教育に関する研究

イ 大学他諸機関との教育普及を目的とした展示についての調査研究

(国立西洋美術館)

展覧会開催のための調査研究を次のとおり実施する。

ア ナポリ宮廷におけるイタリア、ルネサンス及びバロック期の美術に関する調査研究

イ アルブレヒト・デューラーの版画芸術に関する調査研究

教育普及その他の美術館活動のための調査研究を次のとおり実施する。

ア 旧松方コレクションを含む松方コレクション全体に関する調査研究

イ 中世末期から20世紀初頭の西洋美術に関する調査研究

ウ 所蔵版画作品に関する調査研究

エ ル・コルビュジエによる国立西洋美術館本館の設計に関する調査研究

オ 美術館教育に関する調査研究

カ 「国立西洋美術館所蔵作品データベース」に関する研究(科学研究費補助金)

キ 「レンブラント及びレンブラント派における和紙による版画素描作品の研究」(科学研究費補助金)3年目

ク 「アメリカのミュージアムにおける教育プログラムの公共性と民間資金に関する基礎的研究」(科学研究費補助金)2年目

ケ 「美術館の機関アーカイブズに関する調査研究」(科学研究費補助金)2年目
(国立国際美術館)

展覧会開催のための調査研究を次のとおり実施する。

- ア 荒川修作に関する調査研究
- イ 横尾忠則に関する調査研究
- ウ マン・レイに関する調査研究(マン・レイ財団、国立新美術館との共同研究)
- エ ウフィツィ美術館所蔵作品に関する調査研究
- オ 森山大道に関する調査研究
- カ 現代のコンセプチュアル・アートに関する調査研究
- キ メディアアートに関する調査研究
- ク ルノワールの技法と芸術に関する調査研究(国立新美術館、ポーラ美術館との共同研究)

教育普及その他の美術館活動のための調査研究を次のとおり実施する。

- ア 美術館教育に関する研究
 - イ アジアの現代美術並びに美術館運営に関する調査研究(アジア次世代キュレーター会議での共同研究)
 - ウ 展示における所蔵作品の活用方法についての調査研究
- (国立新美術館)

展覧会開催のための調査研究を次のとおり実施する。

- ア 日本の現代美術の動向に関する調査研究
- イ 海外の現代美術の動向に関する調査研究
- ウ ルーシー・リーとヨーロッパの20世紀工芸に関する調査研究(東京国立近代美術館工芸館との共同研究)
- エ ポスト印象派とその影響についての調査研究(オルセー美術館、オーストラリア国立美術館との共同研究)
- オ マン・レイの芸術と生涯に関する調査研究(マン・レイ財団、国立国際美術館との共同研究)
- カ 近代及び現代の美術を中心とした影の表現、意味、機能等についての調査研究(東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館との共同研究)
- キ ゴッホの芸術と生涯に関する調査研究(国立ゴッホ美術館、クレラ=ミュラー美術館、名古屋市美術館との共同研究)
- ク シュルレアリスムの起源とその展開についての調査研究(ポンピドゥー・センターとの共同研究)

教育普及その他の美術館活動のための調査研究を次のとおり実施する。

- ア 美術館の教育普及事業(ワークショップ、鑑賞ガイド等)に関する調査研究
- イ 日本の近現代美術資料に関する調査研究
- ウ 戦後の日本の美術館における展覧会データの収集及び公開に関する調査研究
- エ 美術情報の収集・提供システムに関する調査研究
- オ 美術館におけるデジタル・アーカイブの構築に関する調査研究

(6) 快適な観覧環境等の提供

各館において、引き続き動線の改善や鑑賞しやすさ、理解のしやすさに配慮するための工夫を行う。

また、より良い鑑賞環境を提供するためのさまざまな方途について検討する。

なお、引き続きアンケート調査等の結果を踏まえ、快適な観覧環境等の提供に努める。

(東京国立近代美術館)

<本館>

ア 展覧会カレンダーを配布する。

イ 美術館活用ガイドを配布する。

ウ 所蔵作品展において「フロアガイド(日本語、英語、独語、仏語、中国語、韓国語)」を配布する。

エ 企画展において可能な限り「フロアガイド」を配布する。

オ 企画展(年1回) 所蔵作品展(通年)において、小・中学生向けのセルフガイドを配布する。

カ アンケート調査、予備調査に基づき、小企画の開催場所を会期によって移動させ、会場構成・動線の改善を継続する。

キ 重要文化財11点(うち1点は寄託作品)の展示における重点化を、解説の掲出等で引き続き行う。

<工芸館>

ア フロアガイド、作家名・作品名の読み方、素材・技法等を記載した出品リストを作成・配布するとともに、作家や作品の解説パネルやキャプションを作成・掲示するなど、鑑賞のための情報提供を促進する。

イ 所蔵作品展開催時に設置している各作品の注目ポイントを写真と文章で明示した鑑賞シート(館内設置式のシート)の充実を図り、来館者が興味深く鑑賞できるよう情報提供に努める。

ウ 夏季の「こども工芸館/おとな工芸館」において、子ども向けセルフガイドに加え、親子で鑑賞できるよう大人向けの鑑賞補助資料(鑑賞の手引き)を配布する。また、中学生以上を対象としたセルフガイドを配布し、年代に応じた多様な鑑賞の方法を提案する。

エ 屋外展示作品についての情報を館内に掲示し、来館者への関心を高める。

<フィルムセンター>

ア 展覧会の開催に際し、展示作品の出品目録を配布する。

「映画資料でみる 映画の中の日本文学 Part 3」(1回)

「アニメーションの先駆者 大藤信郎」(1回)

「生誕百年 映画監督 黒澤明」(1回)

計3回配布

(京都国立近代美術館)

ア 館概要(日本語、英語、独語、仏語、西語、伊語、中国語、韓国語)を配布する。

イ 展覧会案内を配布する。

ウ 小・中学生に対してガイドブックを配布する。

エ 京都国立博物館、京都市美術館、京都文化博物館と共同して、年間展覧会案内を配布する。

(国立西洋美術館)

- ア 国立西洋美術館ブリーフガイドを配布する。
- イ 常設展（所蔵作品展）「作品リスト（日本語、英語）」、企画展「作品リスト（日本語、英語）」及び小・中学生向け解説「ジュニアパスポート」を配布する。
- ウ 国立西洋美術館本館の建築探検マップ（日本語、英語、仏語、中国語、韓国語）を配布する。
- エ 「Touch the Museum」のダウンロード・サービス等を実施する。

（国立国際美術館）

- ア 館概要リーフレット（日本語、英語、中国語、韓国語）を配布する。
- イ 展覧会において可能な限り「フロアガイド」を配布する。
- ウ 小・中学生向け解説「ジュニア・セルフガイド」を配布する。

（国立新美術館）

- ア 館フロアガイド（日本語、英語、独語、仏語、西語、中国語、韓国語）を配布する。
- イ 展覧会カレンダーを配布する。
- ウ 展覧会において「フロアガイド」を作成・配付する。
- エ 展覧会において中学生以上を対象とした鑑賞ガイドを作成・配付する。
- オ 文字を大きくし、見やすくした「大きな文字の利用案内」を配布する。
- カ 館内に「ご意見箱」を設置し、対応が必要な意見について適切な措置をとる。

入館料及び開館時間の弾力化等により、入館者サービスの向上を図るため、次のとおり実施する。

- ア 高校生以下及び18歳未満の観覧料無料化の普及広報に努める。
- イ 展覧会の混雑状況を考慮し、開館日・時間等について柔軟な対応を行う。
- ウ 学生等の美術鑑賞への興味と関心を高めるため、キャンパスメンバーズ制度の普及広報に努める。また、本年度から東京国立近代美術館フィルムセンターにおける上映会も対象に加え、キャンパスメンバーズ制度の充実を図る。
- エ 東京国立近代美術館本館・工芸館及び国立西洋美術館は、東京都が実施する外国人旅行者への観光事業「ウェルカムカード」に参加し、外国人旅行者に対して所蔵作品展の割引観覧を実施する。
- オ 東京国立近代美術館、国立西洋美術館及び国立新美術館は、共通入館券事業「ぐるっとパス」に参加し、観覧料の低廉化を図る。
- カ 国立国際美術館は、共通入館券事業「ミュージアムぐるっとパス・関西2010」に参加し、観覧料の低廉化を図る。
- キ 東京国立近代美術館及び国立西洋美術館は、東京都が実施する青少年育成事業「家族ふれあいの日」に参加し、所蔵作品展観覧料の優待を実施する。

（東京国立近代美術館）

- ア 国民に広く美術作品等に親しんでもらうため、所蔵作品展を廉価で観覧できるパスポート観覧券について、ホームページへの情報掲載やチラシを配布するなど、広報に努める。

<本館・工芸館>

- ア 年始は1月2日（日）から開館する。
- イ 休館日のうち、3月28日（月）を開館する。

<フィルムセンター>

- ア 「映画の中の日本文学 Part 3」、「第32回ぴあフィルムフェスティバル」、「生

誕百年 映画監督 黒澤明」、「フィルムセンター開館40周年記念 新収蔵作品選集」において、1日3回上映を実施する。また、「ポルトガル映画祭2010」、「シネマアフリカ2010」では週末及び祝日に1日3回上映を行う。

(京都国立近代美術館)

ア 休館日のうち、5月4日(火・祝)を開館する。

イ 前年度の3月26日から引き続き、10月15日までの企画展開催中の金曜日の閉館時間を、午後8時まで延長する。

ウ 企画展を開催しない土曜日について、コレクション・ギャラリーの無料観覧日を設ける。

エ 京阪カード会社、阪急阪神カード会社等と提携し、カード提示による優待割引を実施し、同社の広報誌による展覧会広報を行うとともに、観覧料の低廉化を図る。

(国立西洋美術館)

ア クレジットカード及び電子マネー(Suica及びPASMO)による観覧券の窓口販売を行う。

イ 休館日のうち、5月4日(火・祝)、8月16日(月)を開館する。

ウ 年始は1月2日(日)から開館する。

エ 春の企画展開催日から秋の企画展閉会日までの開館時間を30分延長し午後5時30分までとする。

オ 「国際博物館の日」に上野地区の諸機関と連携してイベントを行う。

カ 12月を中心にクリスマスイベント(10分トーク、クリスマスキャロル・コンサート)を開催する。

(国立国際美術館)

ア 企画展開催中の金曜日の閉館時間を午後7時まで延長する。

イ 休館日のうち、5月4日(火・祝)を開館する。

ウ 毎月第1土曜日を地下2階で開催するコレクション展、企画展の無料観覧日とする。

エ 「大阪周遊パス2010」、大阪市交通局「共通一日乗車券」に参加し、観覧料の低廉化を図る。

オ 近隣のホテルと提携し、宿泊客に対し優待券を配布し、展覧会広報を行うとともに、観覧料の低廉化を図る。

カ 京阪カード会社、阪急阪神カード会社等と提携し、カード提示による優待割引を実施し、同社の広報誌による展覧会広報を行うとともに、観覧料の低廉化を図る。

(国立新美術館)

ア 「六本木アート・トライアングル」を構成する近隣の美術館と観覧料の相互割引を行う。

イ 美術団体等と協議の上、企画展及び公募展の観覧料の相互割引の実施を推進する。

ウ 同時期に開催する企画展の相互割引を実施する。

エ 共催者と協議の上、共催展の高校生無料観覧日を設定する。

オ クレジットカード及び電子マネー(Suica及びPASMO)による観覧券の窓口販売を行う。

カ 小学生以下の子どもを対象とした託児サービスを通年で実施する。

利用者のニーズを踏まえ、ミュージアムショップやレストラン等の充実を図る。

ア 東京国立近代美術館では、レストランにおける季節メニューや展覧会にちなんだ特

別メニュー等、最新の情報をホームページで広報するとともに、より一層の利用者へのサービスを図るべく連携・協力を行う。

イ 国立国際美術館では、レストランと連携・協力してホームページに掲載されているメニュー情報等を充実させ、美術館利用者への広報を行う。

ウ 国立新美術館では、ミュージアムショップ内に設けたギャラリーの企画協力を行うとともに、レストランやミュージアムショップとの意見交換の場を設け、一体となって検討し、利用者へのサービスの向上を図る。

2 我が国の近・現代美術及び海外の美術を体系的・通史的に提示し得るナショナルコレクションの形成・継承

(1)-1 各館の収集方針に沿って、体系的・通史的にバランスのとれた所蔵作品の蓄積を図る。作品の収集に当たっては、その美術史的価値や意義等についての外部有識者の意見等を踏まえ、適切な購入を図る。また、収集活動を適時適切に行うために、美術作品の動向に関する情報の入手と機動性の向上に努める。

あわせて購入した美術作品に関する情報をホームページで引き続き公開する。

(東京国立近代美術館)

<本館>

近代日本美術の体系的コレクションの構築を引き続き図りつつ、近代日本美術に影響を与えた欧米作家作品の収集も積極的に行う。特に次の点に留意する。

日本人作家に多大な影響を与えた1900 - 1940年代の欧米作家作品の収集

1970年代以降の日本人作家の作品の収集

<工芸館>

近代日本における工芸の体系的コレクションの充実を図る。特に次の点に留意する。

日本工芸の近代化を示す作品の補完

戦後から現代にいたる伝統工芸やクラフト、造形的な表現の重要作品の収集

近代の茶の湯の工芸を代表する作品の収集

近・現代ヨーロッパの工芸及びデザイン作品の収集

<フィルムセンター>

戦前の日本映画を中心に散逸や劣化、滅失の危険性が高い映画フィルム、日本劇映画のうちでビネガーシンドロームや褪色のおそれ強い1950年代後半から60年代の映画フィルム、委員会方式による製作等の原因により著作権の帰属や原版保管の継続性が不安定な1990年代以降の映画フィルム、デジタル技術により復元された映画フィルム及び複製物、上映会や共催事業、国際交流事業に必要な映画フィルム、これまで受入のなかった会社等からの寄贈映画フィルム、文化庁との共同事業による「近代歴史資料調査」によって残存が確認された映画フィルム、の収集に努める。

なお、本年度は次の点について、特に留意する。

アメリカ返還映画、小宮登美次郎コレクション、杉本五郎コレクション等、フィルムセンターにおけるフィルム所蔵の形成において重要な役割を果たしたコレクションについて、適切な保存・復元を要する作品の複製物の収集

企業等の管理下に置かれていないため、散逸・劣化の可能性が著しい非商業映画、

映画産業の枠外で製作された日本映画のより一層の収集

海外との合作により製作された日本映画のより一層の収集

戦前日本アニメーション映画の発掘・復元と、戦後日本アニメーション映画の主要な作品の一層の収集

(京都国立近代美術館)

我が国の近・現代において生み出された美術、工芸、建築、デザイン、写真等で、主として美術・工芸について、近代日本美術史の骨格を形成する代表作及び各時期において重要な位置を占める記念的作品、近代美術史に組み込まれていくことになる現代美術の秀作を積極的に収集するとともに、優れた写真作品の収集にも努める。あわせてダダ等ヨーロッパの前衛作品の収集を進めるほか、ビデオインスタレーション等のメディアアートの作品を引き続き収集する。

また、池田満寿夫と並ぶ同時代の重要な版画家である吉原英雄と井田照一の作品調査を継続し、寄贈受入の準備を図る。さらに、故・川西英が所蔵した創作版画作品・資料の収集を継続し、グラフィック関連作品の集中的アーカイブの構築を目指す。

京都に設置されている立地条件から、京都を中心とする関西ないし西日本に重点を置き、地域性に立脚した所蔵作品の充実を図る。また、京都画壇作品の収集を継続し、その充実を図る。

(国立西洋美術館)

15世紀～20世紀初頭のヨーロッパ絵画の収集に努める。

ドイツ・フランドル・イタリア・フランスを中心にヨーロッパ版画のコレクションを充実させる。

旧松方コレクション作品の情報収集を継続する。

(国立国際美術館)

日本美術の発展と世界の美術との関連を明らかにするため、主として、次のとおり収集する。

1945年以降の日本の現代美術の系統的収集(日本の戦後美術を跡づける主要作)

国際的に注目される国内外の同時代の美術の収集。

また、映像・メディアアート担当客員研究員による収集候補作品のリストアップを行う。

(1)-2 寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、所蔵作品展等における積極的な活用を図る。

(1)-3 各館の陳列品購入費を一部留保し、高額作品の購入、緊急な購入等に対応する。
なお、作品収集に関しては、学芸課長会議等で情報交換や連絡調整を行う。

(2)-1 保存施設の狭隘・老朽化への対応に取り組む。

引き続き、東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館に隣接する国有地の利用について検討する「キャンプ淵野辺留保地整備計画検討委員会」に参加し、検討・協議を行うなど、収蔵施設・設備の拡充について検討する。

平成21年度補正予算において認められた東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館の増築工事に着手、竣工するとともに、既存施設の老朽化等の対応について検討を行う。

(2)-2 京都国立近代美術館において老朽化した空気調和設備・建物等の改修工事を実施する。

(3) 所蔵作品の保存状況について、各館の連携・調整を行い、特に緊急に処置を必要とする作品について重点的に修理・修復を行う。

東京国立近代美術館本館では、作品貸与時の対応も含め、保存科学と修復に関する外部の専門家との定常的な連携を引き続き進める。洋画全点点検を終了させ、版画保管状況改善を進める。また、日本画の大規模修復を計画的に推進する。

東京国立近代美術館工芸館では、引き続き、展示や貸出の頻度の高い松田権六の漆芸作品、木村雨山や志村ふくみの染織作品等の保存修復を行う。

東京国立近代美術館フィルムセンターでは、日本における本格的な記録映画の嚆矢となった『日本南極探検』(1912年)について、文化庁との「近代歴史資料調査」により確認された可燃性フィルムと、所蔵フィルムとの比較調査を行う。また、日本における個人映画の草創期の作品について、寄贈フィルムからの復元により、上映用プリントの作成を行う。

京都国立近代美術館では、藤田嗣治《タピスリーの裸婦》への低反射ガラスの装着、寄贈を受けた須田国太郎洋画作品の修復・額装を行う。

国立西洋美術館では、版画・素描作品及び緊急に処置を要する絵画作品について、保存修復処置を行う。

国立国際美術館では、デザイン(横尾忠則)等の保存修復処置を行う。

(4) 国内外の博物館・美術館、大学等と連携し、所蔵作品や関連する館外の美術品及び保管・修理に関する調査研究を実施し、その成果を業務に反映させる。

東京国立近代美術館本館では、代表的な所蔵作品の一つ、巖光《眼のある風景》につき、東京文化財研究所による光学的調査に協力し、その成果を所蔵作品展内で活用する。

東京国立近代美術館工芸館では、愛知県陶磁資料館や国際デザインセンター、日本クラフトデザイン協会、日本工芸会等と、陶芸並びにプロダクトデザイン作品の調査を実施し、近年の傾向の分析と展示に関する研究を行う。

東京国立近代美術館フィルムセンターでは、映画フィルムの登録・長期保管・保存、アナログ及びデジタル技術を活用した復元に関する調査研究(FIAF会員、国内外の同種機関、映画研究教育機関、美術館・博物館、映像機器メーカー、現像所等との共同研究)を行い、その成果を上映企画等に反映させる。

京都国立近代美術館では、客員研究員の指導のもとに、引き続き写真作品の管理保管システムの再編成を進め、安全で迅速な利用態勢を整える。

3 我が国における美術館のナショナルセンターとして美術館活動全体の活性化に寄与

(1) 各館の調査研究の成果については、研究紀要、図録への論文発表等によって広く発信する。

国立美術館 5 館の事業成果を取りまとめた国立美術館年報について、本部において編集し発行する。

(東京国立近代美術館)

<本館>

研究紀要、展覧会や企画上映に伴う図録、「現代の眼」、「NFC ニュースレター」等の刊行物を発行する。

小・中学生向け解説パンフレット「セルフガイド」を発行する。

<工芸館>

展覧会に伴う図録を発行する。

夏季に開催する「こども工芸館／おとな工芸館」展において、小学生と未就学児向け解説パンフレット「セルフガイド」及び中学生以上を対象とした「セルフガイド」を発行する。

引き続き「ルーシー・リー展」(平成 22 年度国立新美術館で開催予定)に関連して、イギリスの研究者、工芸家との研究交流を行い、東洋陶磁学会研究会等で発表する。

「グエッリーノ・トラモンティ展」(平成 23 年度工芸館で開催予定)に関連して、イタリアの研究者との研究交流を行い、東洋陶磁学会研究会等で発表する。

<フィルムセンター>

・「第 63 回国際フィルム・アーカイブ連盟東京会議」の記録集の編集・発行を行う。

(京都国立近代美術館)

展覧会に伴う図録、美術館ニュース「視る」を発行する。

京都国立近代美術館研究誌「CROSS SECTIONS」第 3 号を発行する。

コレクションギャラリーでの小企画に対応した解説をホームページ上に公開する。

(国立西洋美術館)

研究紀要、展覧会に伴う図録、「国立西洋美術館ニュース ZEPHYROS」を発行する。

展覧会に伴う小・中学生向け解説パンフレット「ジュニアパスポート」を発行する。

(国立国際美術館)

展覧会に伴う図録及び「美術館ニュース」を発行する。

小・中学生向け解説「ジュニア・セルフガイド」を発行する。

(国立新美術館)

展覧会に伴う図録及び「国立新美術館ニュース」を発行する。

中学生以上を対象とした鑑賞ガイドを発行する。

(2)-1 国内外の研究者を招へいし、各種セミナー・シンポジウムを開催する。

東京国立近代美術館本館では、「建築はどこにあるの? 7 つのインスタレーション」の開催に関連して、また、科学研究費補助金による研究「1960~70 年代のビデオ・アート: 作品の所在調査とデータ・ベース構築」(3 年目)の総括として、研究者等を招きセミナーないしシンポジウムを開催する。

東京国立近代美術館工芸館では、「現代工芸への視点」展にあわせ、テーマとなる茶

の工芸に関するイベント、講演会を開催する。

東京国立近代美術館フィルムセンターでは、ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」(10月27日)を記念して講演会等を開催する。

京都国立近代美術館では、「マイ・フェイバリット - とある美術の検索目録 / 所蔵作品から」展、「『日本画』の前衛 1938 - 1949」展及び「パウル・クレー 創成する芸術(仮称)」展にあわせ、連続講演会やシンポジウムを開催する。

また、パリ日本文化会館で開催される「近代日本工芸 1900 - 1930展(仮称)」にあわせ、国際シンポジウムを開催する。

国立西洋美術館では、「フランク・ブランギン展」にあわせ、ブランギンの芸術活動に焦点を合わせた記念講演会を開催する。「レンブラント：光の画家(仮称)」展では、レンブラントとレンブラント派の作品における光の表現を巡って平成23年3月13、14日の2日間で国際シンポジウムを開催する。

国立新美術館では、「オルセー美術館展2010 「ポスト印象派」」にあわせた講演会並びにポスト印象派に関するシンポジウム、美術資料をテーマにしたレクチャー、セミナー等を開催する。

(2)-2 東京国立近代美術館工芸館では、我が国の工芸美術を紹介するための海外展の開催の可能性について関係機関と協議する。

(3) 東京国立近代美術館フィルムセンターでは、国際フィルム・アーカイブ連盟加盟機関及び国内映像関連団体並びに研究機関等と情報交換を図りながら、映画フィルム等の保存・修復活動を行う。

(4) 所蔵作品について、その保存状況や展示計画を勘案しつつ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設に対し、貸与等を積極的に実施する。

東京国立近代美術館本館では、作品の状態や同館での活用計画を踏まえ、借用依頼に積極的に対応する。東京国立博物館の「細川家の至宝 - 珠玉の永青文庫コレクション」展、香川県立東山魁夷せとうち美術館の「道 - 心に刻まれた風景」展、札幌芸術の森美術館他の「片岡球子展」等に貸与予定である。

東京国立近代美術館フィルムセンターでは、最新の保存・復元の成果を広く紹介するために、所蔵日本映画を中心にパッケージ化し、地方及び海外の同種機関を中心に共催等による上映会を開催する。また、所蔵日本映画について、DVDの作成・販売、CSチャンネルによるテレビ放映等を通じて、より広範な観客層への普及活動を検討する。

京都国立近代美術館では、従来通り、借用依頼に積極的に対応する。島根県立美術館と富山県水墨美術館に河井寛次郎のコレクションを、富山県立近代美術館に池田満寿夫のコレクションを、まとめて貸与する。

また、パリ日本文化会館で開催される「近代日本工芸 1900 - 1930展(仮称)」にも所蔵作品の多くを貸与予定である。

国立国際美術館では、作品の状態や同館での活用計画を踏まえ、借用依頼に積極的に対応する。

シカゴ現代美術館の「リュック・タイマンズ」展等に貸与予定である。

- (5) 美術教育の一翼を担うナショナルセンターとして、次の事業を行う。
小・中学校の教員や学芸員が、学校や美術館で活用できる鑑賞教育用教材の普及を図る。
各地域の学校と美術館の関係の活性化を図るとともに、子どもたちに対する鑑賞教育の充実に資するため、各地域の鑑賞教育や教育普及事業に携わる小・中学校の教員と学芸員等が一堂に会し、グループ討議等を行う「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」を国立美術館の研究員の研究成果と協働により実施する。
あわせて、法人ホームページでの実施概要の掲載、記録集の発行、配布を通じ幅広い層への広報に努める。
期間：平成22年7月26日～28日
会場：東京国立近代美術館、国立新美術館
上記の研修について教員免許更新講習として実施する。
これまでの参加者にアンケートとヒアリングを行い、次期中期計画での実施を検討する。
- (6) インターンシップ等の事業を次のとおり実施する。
各館においてインターンシップ制度を実施する。
東京国立近代美術館工芸館及びフィルムセンターにおいて、大学生の学芸員資格取得のための博物館実習を実施する。
国立西洋美術館において、大学院（東京大学大学院人文社会系研究科）と連携して西洋美術に関する教育を行う。
- (7) 公私立美術館の学芸担当職員を対象としたキュレーター研修を実施し、その専門的知識及び技術の向上を図る。
- (8)-1 東京国立近代美術館フィルムセンターでは、我が国の映画文化振興の中核的機関として次のとおり実施する。
国内外で実施される各種映画祭や大学等の映画・映像に関する研究会等に協力する。
大学等との連携事業を図るための委員会において、連携事業の実施のための検討を行う。
映画の保存事業等について助言を求めるとともに、当該事業に関連した人材育成のあり方について検討を進めるため、識者や関係者を集め会議を開催する。
文化庁が実施する映画関連の事業に、施設の提供等で協力する。
文化庁が実施する「日本映画情報システム」事業に協力する。
相模原市及び独立行政法人宇宙航空研究開発機構との文化事業等協力協定に基づき、資源及び情報等を活用し、文化事業を連携・協力して行う。
第66回国際フィルム・アーカイブ連盟（FIAF）会議に研究員等が出席し、シンポジウム等で発表を行う。
- (8)-2 東京国立近代美術館フィルムセンターでは、より機動的かつ柔軟な運営を行うため、国立美術館内における独立した一館となることを含むさまざまな独立の可能性を探るべく、その機能拡充について、検討を行う。

4 運営委員会及び外部評価委員会の指摘等を館長会議等において検討し、法人運営・事業等に反映させる。

業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

- 1 業務運営の一層の効率化を進めるため、次のような措置を講ずる。
 - 国立美術館5館の事業成果を取りまとめた国立美術館年報について、本部において編集し発行する。
 - 国立美術館5館の情報システムネットワークの一元化を基盤として、引き続きTV会議システム、グループウェア等の活用による効率化を進める。
 - 民間競争入札による民間委託を導入した東京国立近代美術館本館及び工芸館の管理・運営業務（展示事業の企画等を除く）の成果について検証等を行い、その結果を踏まえ、対象範囲等の拡大について検討する。
 - 施設の有効利用のため、引き続き外部貸出による講堂等の利用率の向上及び閉館時等におけるエントランスロビー等の活用を図る。
 - 対象業務の拡大や契約の包括化により、引き続き競争入札を推進する。
 - 国立美術館契約監視委員会における随意契約等に関する意見を踏まえ、契約方式の見直し等を実施する。
- 2 外部の有識者による評価及び職員の意識改善
 - 運営委員会及び外部評価委員会による業務の実績に関する評価を組織、事務、事業等の改善に反映させる。
 - 会計・人事等の研修を通じて職員の意識改革と資質の向上を図り、あわせて組織の活性化を図る。
 - 人事評価制度の見直しについて、国及び他の独立行政法人の状況等を参考とし、さらなる制度設計の検討を行う。
- 3 国立美術館が管理する情報の安全性の向上のため、コンピュータウィルスに関連する情報を職員に周知し、情報セキュリティへの意識向上に継続して努める。
 - また、いわゆる情報セキュリティポリシーにあたる「国立美術館情報資産安全対策基本方針」、「国立美術館情報資産安全管理規則」を踏まえ、安全管理のための実施細則の策定を進める。
- 4 人件費については、平成17年度に比較して、5%以上の削減を達成できるよう、より一層、組織の見直し、人員の削減等に努める。

予算（人件費の見積もりを含む）収支計画及び資金計画

- 1 外部資金の活用、自己収入の増大に努める。
- 2 予算（年度計画の予算）
 - 別紙のとおり。
- 3 収支計画

別紙のとおり。

4 資金計画

別紙のとおり。

その他主務省令で定める業務運営に関する事項

1 人事に関する計画

職員の研修計画

職員の意識向上を図るため、次の職員研修を実施する。

ア 新規採用者・転任者職員研修

イ 接遇研修

ウ メンタルヘルスケアに関連する研修

外部の研修に職員を積極的に派遣し、その資質の向上を図る。特に研究職職員への研修機会の増大に努める。

2 メンタルヘルスケアへの対応

職員のメンタルヘルスケアの一層の推進を図る。

3 施設・設備に関する計画

施設・設備の整備を計画的に推進する。

2 予算(年度計画の予算)

平成22年度予算

(単位:百万円)

区 分	金 額
収 入	
運営費交付金	5,859
展示事業等収入	995
施設整備費補助金	6,699
計	13,553
支 出	
運営事業費	6,854
管理部門経費	1,731
うち人件費	305
うち一般管理費	1,426
事業部門経費	5,123
うち人件費	791
うち展示事業費	3,308
うち調査研究事業費	167
うち教育普及事業費	857
施設整備費	6,699
計	13,553

3 収支計画

平成22年度収支計画

(単位:百万円)

区 分	金 額
費用の部	5,534
經常経費	5,534
管理部門経費	1,695
うち人件費	305
うち一般管理費	1,390
事業部門経費	3,691
うち人件費	791
うち展示事業費	1,884
うち調査研究事業費	165
うち教育普及事業費	851
減価償却費	148
収益の部	5,534
運営費交付金収益	4,391
展示事業等の収入	995
資産見返運営費交付金戻入	132
資産見返物品受贈額戻入	16

4 資金計画

平成22年度資金計画

(単位:百万円)

区 分	金 額
資金支出	13,553
業務活動による支出	6,782
投資活動による支出	6,771
資金収入	13,553
業務活動による収入	6,854
運営費交付金による収入	5,859
展示事業等による収入	995
投資活動による収入	6,699
施設整備費補助金による収入	6,699